

九州大学医学部熱帯医学研究会

第47期 活動企画書

2012

Academic Society of Tropical Medicine

Kyushu University

## 目次

---

---

### 会長あいさつ

中西 洋一 九州大学大学院医学研究院  
臨床医学部門内科学呼吸器内科分野 教授

### 総務挨拶

藤本 晃嗣 九州大学医学部医学科4年

### 【海外研修班】

フィリピン班  
チュニジア班  
アフリカケニア班

### 【国内研修班】

かにた婦人の村班

### 第47期予算

---

---

# 会長挨拶

熱の冷めた後

九州人は熱しやすく冷めやすいといわれる。それは時に良い方向へ、時に悪い方向へ我々を導く。ある種の「乗りの良さ」は、リスクを背負ってのミッション遂行には欠かせない資質である。いつも、あるいはいつまでも、わずかな不安に脅えているのでは、改革も前進もイノベーションも起こりはしない。現在のようなある種の閉塞感に包まれた状況の中では、チャレンジは時代の要請でもある。明治維新を支えたのは命をかけて脱藩した下級武士達であったし、アメリカ大陸を発見して今の世界の構図を完成させたのは地獄の滝に落下するという忠告を無視して大洋へ漕ぎ出したコロンブスと配下の船乗りたちであった。

一方で、このような挑戦が失敗したときに、その行動は迂闊とか軽率という言葉で責められる。たとえば、日本人で始めて 8000 メートル峰全制覇の快挙を果たした竹内洋岳氏は大きな歓声で迎えられた。しかし、登頂直前にここで引き返さないと日没までにテントのあるキャンプ 3 まで戻れない状況となり、進むか戻るかの選択を迫られたという。結局登坂を選び、下山に際してはテントのない山中にビバークすることになる。幸いにして彼は生還を果たすのだが、天候がわずかでも悪化していれば下山は不可能であったろうし、彼についての評価もまったく異なるものになったであろう。周到な準備と、納得の選択、そして幸運の女神が微笑んでくれることがチャレンジャーに求められる。

さて、熱狂や歓喜の後に訪れるのは何であろうか？ 静寂、反省、退屈、倦怠？ 実は、その後に何をもたすことができるかという点に真価が隠されている。成功はそれに続く地味な努力によって真に報われるし、それなくしては真の成功とは言い難い。信長も秀吉も国民的人気者であるが、それは短命政権に終わったことと、それに続く家康が不人気を一手に引き受けたからであろう。義経とて同じことである。時代を変えたのは一部の英雄達であるが、時代を創ったのはその後続く者達の地道な努力なのである。つまり、熱の冷めた後にこそ、真の意味でのイノベーションが存在するのである。

今年の活動計画を拝見した。フィリピン、ケニア、チュニジア、館山ということであるが、それぞれに確かなモチベーションと知的好奇心の中での活動が期待される。例年、活動の中から若者らしい新鮮な視点からしっかりとした報告をいただき、熱研の志気は益々さかんである。今年も気をつけて旅立って欲しい。そして、熱の冷めた後の事にも少し想いを馳せていただければ幸いである。

九州大学医学部熱帯医学研究会 会長  
九州大学大学院医学研究院臨床医学部門内科学呼吸器内科分野 教授  
中西 洋一

## 総務あいさつ

増える一方であった部員数の増加も、3月に7名の先輩が卒業され、やや落ち着いた感があります。その結果か、外へと向いていた部の雰囲気も内部の充実へと向かいつつある印象を受けます。そして、今年度の企画もその影響を受けたのか、自分たちが本当にやりたいことに取り組もうとしている企画が目立ちます。

具体的には、基礎医学の立場にスポットをあてたフィリピン班、民主主義の立場から医療をとらえようとしているチュニジア班、この数年取り上げられていなかった熱帯病の現状をテーマとしたアフリカケニア班といった企画を海外に関しては立案させていただきました。また、国内では社会的弱者の長期保護施設の現状を直接経験しようとしているかにた婦人の村班を立案させていただいております。

今年度は自分の目で何かをみたいという企画もあれば、直接受け入れ先の人と一緒に汗をかこうとしている企画もあり、なんらかの行為への情熱を形にしようとしています。ややもすれば、頭でっかちになりがちな熱帯医学研究会の活動なので、その思いが形骸化して有限無実行とならないよう全力で取り組んでいきたいと思っています。

まだまだ至らない点は多数あると思いますが、今年度も叱咤激励いただければ幸いです。

九州大学医学部熱帯医学研究会  
九州大学 医学部医学科 4年  
藤本 晃嗣

# フィリピン班

## 【背景と目的】

レプトスピラは、1915年に九州大学医学部の稲田龍吉教授によって発見された病原細菌である。レプトスピラ感染症は熱帯、亜熱帯地方を中心に広く分布する人獣共通感染症であり、WHO(1999)によると全世界で患者発生は年間50万人、死亡率は23%と推測されている。

九州大学大学院医学研究院細菌学分野は、「地球規模課題対応国際科学技術協力」事業として、2010年よりレプトスピラ症の流行地であるフィリピン国の機関と共同で、「レプトスピラ症の予防対策と診断技術の開発プロジェクト」を行なっている。このプロジェクトは①疫学調査による感染実態の把握、②迅速診断キットの開発、③DNAワクチンの開発、④予防に関する啓発活動の強化を通じて、フィリピンにおけるレプトスピラ症予防対策の研究開発能力が強化されることを目指している。

本活動班の目的は、上記のプロジェクトに接することで、開発途上国の抱える感染症の問題に対し、日本の研究者として問題解決に向けてどのようなアプローチで協力していけるのかを学ぶことである。また、プロジェクトの一環として計画されている、環境中のレプトスピラの分布調査をフィリピンで行い、感染実態の解明に役立てたい。

## 【班員】

宮原敏（九州大学大学院医学系学府医学専攻 細菌学分野 MD-PhD コース3年）

久保山雄介（九州大学医学部医学科3年）

深水倫子（九州大学医学部医学科3年）

大保文香（九州大学医学部保健学科看護学専攻2年）

野田美香（九州大学医学部保健学科看護学専攻1年）

本島恵理香（九州大学医学部保健学科看護学専攻1年）

## 【活動期間】

8月3日～9日

## 【受入先機関】

九州大学大学院医学研究院細菌学分野

フィリピン大学マニラ校公衆衛生学部

## 【活動内容】

プロジェクト実施機関への訪問および関係者へのインタビューを行う

マニラ市内の水たまりから選択培地を用いてレプトスピラを分離しその分布を調査する

## 【抱負】

これまでの私の熱研での活動は、臨床医として取り組む問題をテーマとしたものばかりであったが、今回の活動班は国際保健に対し基礎研究者の立場からできることを考えてみたい。また今回、小規模なりにも現地フィールド調査をする機会を得られた。現地でのサンプル採取にとどまらず、国内で十分に事前学習を行ない、調査の計画を立て、帰国後はデータを整理し考察するまでを、学部生の班員とともに行うつもりである。

# チュニジア班

## 【背景と目的】

「民主主義は医療に必要なか」

当班の活動目的は上記の一文に代表される。現状維持の状態では、近年中に崩壊が容易に推測される日本の医療制度改革を提案した、昨年度のリトアニア班での活動を通して、民主主義の医療に与える影響を考察したい。医療保険制度では、費用の推移を単純に概説すれば、大部分の国民は政府に保険料を徴収され、必要に応じて再配分されている。使用者においても同様に再配分を受けている。この体制は社会主義の概念に基づくものであり、政府が決定する医療保険制度によって診療費が規定されている現行医療は、社会自体が資本主義の拡張を見せる中、社会主義に則っている。医療に民主主義は必要なのであろうか。

デンマークやスウェーデン等の高福祉高負担を特徴とする国家は、体制を鑑みただけでは社会主義体制が強い様に思われるが、国際的な民主主義達成度ではデンマークが世界1位と評価されている\*。逆説的に言えば、議会が国民を代表する構造の日本の民主主義達成度は、国際的な水準では高くなく、民主主義とは形骸した構造のみでは決して規定されていない。

医療における民主主義を考察するに当たり、2011年「アラブの春」によって、民主化を最初に達成したチュニジアを活動地を選んだ。チュニジアでは、貧富の差が以前甚だしく、学生ができる社会奉仕としてボランティアを行うことも目的の一つとしている。

\*NCCR democracy. Medienkonferenz: Neues Demokratiebarometer zeigt die besten Demokratien. Press release, Zurich, Switzerland. 27th November, 2011.

## 【班員】

中西亨（九州大学医学部5年）

## 【活動期間】

調整中（7月下旬から8月初旬に一週間）

## 【受入先機関】

活動地 チュニジア共和国 首都チュニス  
九州歯科大学口腔顎顔面外科学形態機能再建学分野  
チュニジア保健省

## 【抱負】

私の熱帯医学研究会の活動視点は、常に医療政策にあった。今回の活動では、政策を考える上での、イデオロギー自体に対する考察を行うことが大きな目的である。昨年度の活動から発展したテーマであるから、より俯瞰的な活動を展開していく。同時に、熱帯医学研究会は社会組織であり、社会に有用な存在でありたいと願っている。学生が実行できる社会奉仕としてのボランティアに参加することで、その役割を果たしたい。

# アフリカケニア班

## 【活動目的】

熱帯地域特有の感染症の現状及び対策について学ぶ。それとともにアフリカの公衆衛生について考える。

## 【班員】

佐々木大貴（医学科 2 年） 班長

高上紀之（医学科 4 年）

手島鋭（医学科 4 年）

班員募集中

## 【活動期間】

8 月中に 2 週間程度

## 【活動場所】

アフリカ、ケニア

長崎大学熱帯医学研究所海外研究教育ケニア拠点

## 【抱負】

これまで人類が感染症に脅かされてこなかった時代はないであろう。しかしながら急速に発展する医療は感染症に対して数多くの対抗手段を開発してきた。その成果もあり現在、日本においては易感染宿主の肺炎などをのぞいたいわゆる“熱帯病”といわれるような感染症が原因で亡くなる人は少なくなってきている。これに対して世界に目を向けてみると発展途上国においては死因の上位を占め未だに大きな脅威であり続けており、アフリカでは特にマラリアやデング熱、ウエストナイル熱などの熱帯病が猛威を振るっている。

今回活動受け入れ先として予定している長崎大学熱帯医学研究所では、1981 年より、ケニア中央医学研究所と合同で、ケニアのナイロビ、クワレ、スバ地区などにおいてマラリアやビルハルツ住血吸虫症、ウエストナイル熱などの感染症に関する疫学調査及び研究を行ってきた。今回は日本と大きく離れた環境であるアフリカを訪れ研修活動を行い、アフリカの医療の現状について熱帯病を通して学びたい。

## かにた婦人の村班

### 【活動目的】

精神疾患のために社会的弱者となった人々と、ともに生活することでそういった人々の在り方に直接触れる。

### 【班員】

藤本 晃嗣 班長（医学部医学科 4 年）

林田 尚也 班員（医学部医学科 1 年）

### 【活動期間】

8 月 13 日から 24 日まで

### 【活動地】

かにた婦人の村（千葉県館山市）

### 【抱負】

かにた婦人の村は売春婦のための長期婦人保護施設として昭和 40 年に設立された。この施設の特徴は、「長期」保護施設であるので更生や社会復帰を支援することが必ずしも前提となっているわけではないという点である。実際に施設内には納骨堂があり、文字通りこの施設に骨を埋めるものもいるということである。また、言うまでもないことかもしれないが、医療機関でもない。そして、この施設に入所している元売春婦というのは、精神疾患などのために売春を職業とせざるを得なかった者も多い。それでもこの施設ではそういった人たちでも出来る生産活動を行うことで自給自足の生活を送っている。

今回の活動では、こういった人々と共に作業をおこなうことで、同じ高さの目線で、精神疾患や身体障害のために社会的弱者となった人々の在り方や考え方に直接触れる機会にし、将来、医療従事者としてこういった人と接することになった際の参考とする。また、医療機関以外の場所で精神疾患等を持った人がどのような生活を送っているかということを直接経験する機会にする。

## 第 47 期予算

### <収入予定>

前年度繰越金	1,240,463
寄付	
九州大学医学部同窓会	350,000
九州大学学生後援会	24,000
賛助団体・個人からの寄付	777,000
部費	126,000
自己負担	941,600
総計	3,459,063

### <支出予定>

一般会計	
企画書作成費	10,000
報告書作成費	120,000
行事関連費	80,000
通信費	60,000
用具購入費・雑費	60,000
特別会計	
フィリピン班	372,000
アフリカケニア班	900,000
チュニジア班	214,000
かにた婦人の村班	100,000
総計	2,002,000

来年度繰越金 1,543,063

---

## 連絡先

〒812-0035 福岡県福岡市博多区中呉服町8-1-202号  
グランフォーレプライム博多  
九州大学医学部熱帯医学研究会  
総務 藤本晃嗣（九州大学医学部4年）  
070-6553-7508  
fui5844433@gmail.com

## 事務局連絡先

〒812-8582 福岡県福岡市東区馬出3-1-1  
九州大学医学研究院 臨床医学部門 内科学呼吸器内科教室気付  
092-642-5378

---

<http://tropical.umin.ac.jp>